

# すくすく たけのこ



## 「若竹」のように“すくすくと伸びゆく子”に

青々とした新緑に爽やかな風が吹き抜け、「希望の学び舎」に、元気な子どもたちの声が今日も響き渡っています。

関西創価小学校には、入学した1年生が楽しみにしている行事がたくさんあります。そのひとつが4月末に行われる**“たけのこほり”**です。この行事は、創立者が命名された「平和竹林」で行うもので、今年もたくさんのたけのこを掘り、給食で美味しくいただきました。毎年、創立者にもお届けしています。



この行事を1年生が楽しみにしているのには、**2つの理由**があるからです。1つは、**“たけのこほり”**という貴重な体験ができること。もう1つは、この体験を上級生のお兄さんやお姉さんと一緒にできるということです。

本校には、「きょうだい活動」という学習活動があります。これは、創価学園の合言葉である**「先輩は後輩を、弟・妹のようにかわいがって、大切にしていかなばならない。後輩は先輩を、兄・姉のように尊敬していかなばならない」**との言葉を日常の教育活動に展開したものです。たけのこほりは、1年生に4年生が教えます。さつまいもの苗の植え付けやほり方は5年生。6年生とは、「きょうだい学年」としてペアをつくり、様々な活動を行います。2年生や3年生にも、それぞれ「きょうだい活動」があります。縦と横のつながりが織りなす**“美しい友情という織物”**、それが創価の特色のひとつです。



さて、話は少し変わりますが、この教育コラムは「すくすくたけのこ」という題名です。「桜と竹の学校」と謳われる関西創価小学校。校歌には、桜と竹がモチーフとして登場。2番の歌詞は「たけのこ すくすく」とはじまります。「若竹」のように**“すくすくと伸びゆく子”**にとは、親のみならず、私たち教師も含めた**すべての大人の願い**といってもよいでしょう。



創立者・池田先生は、学園生に対して様々なメッセージを贈ってくださっていますが、「竹」を題材にしたお話も数多くされています。今回は、その中からひとつ紹介いたしましょう。

それは、『新・人間革命』**「若芽の章」51**に書かれているもので、創価小学校ではじめて行われた運動会がその場面です。閉会式でのスピーチの中で、「今日は、ちょっと難しい話をします。児童の皆さんよりも、**むしろ、保護者の方にお話し申し上げたい**と思います。」と前置きをされ、**「筍(たけのこ)を育てる名人」**の話を紹介されました。

「多くの方は、“筍”というのは、毎年、5月ごろになって初めて生長し、立派に大きくなる”と思っているようですが、それは間違いで、実は、収穫する年ではなく、**前年の7月、8月ごろに、地下茎に**

小さな芽ができる。これで勝負が決まってしまう。4月とか、5月というのは、一つの結果としての姿を見るにすぎないという話に私は感銘した。なぜなら、人間も同じだからです。」

と語られ、「**小学校時代の教育が、将来の大成を決める、大事な時期になる**」と明言されました。人はとかく目に見えるものに目を奪われがちですが、筍の話を通され、**目に見えない根っこをはる時期**、とりわけ**小学校時代における人格形成の大切さ**を教えてくださいました。



関西創価小学校の「平和竹林」でたけのこほりを経験して巣立っていった**卒業生も4000名**を超えました。一期生は今年50歳となります。外交官や弁護士、国際的な学者やスポーツ選手、国会議員、教員など様々な場所で活躍しています。私たちは、「**教育の成果は、卒業生できまる**」といった言葉を胸に、これからも力強く前進していきたいと決意しています。



教員にとって、巣立った子どもたちが母校に帰ってきてくれるほど嬉しいことはありません。その中の一人が小学校時代を振り返り、後輩たちに次のような言葉を残してくれました。

「私が今ここにいるのは、**関西創価小学校で学んだ時代があったから**です。振り返ると、私には**“4つの宝物”**がありました。

1つ目の宝は、「**温かく情熱的な先生方**」の存在です。私の**“前”**で、いつも**“学ぶことの楽しさ”**を教えてくださいました。ある時は、**“横”**で寄り添いながら、一緒に歩いてくれました。

2つ目の宝物は、私の**“横”**には、いつも**「素晴らしい友達」**がいたことです。小学校で友情を結んだ友達とは、卒業しても声を掛け合い、励まし合って進んでいます。仕事や家庭、それぞれ活躍する舞台は違っても、目指すところは同じです。

“生涯の友人を持つことができた”ということが、私の2つ目の宝物です。

3つ目の宝物は、私を支えてくれた**「両親」**であり、地域のおじさんはやおばさんたちをはじめとする**「サポートして下さる方々」**の存在です。これらの人たちは、私の**“後ろ”**にいて「大丈夫」「頑張れ」「負けるな」と励ましてくださいました。この力が私を前に前へと進めてくれました。

そして4つ目の宝は、何といたって**「創業者・池田先生」**がいらっしゃるということです。いつも私の**“前”**で、正しく歩む**“使命の道”**を示してくださいました。

このように、気がつけば私の**小学校時代は、**“前後左右”****で、それぞれの宝物が、私を守り、導き、支え、一緒に歩いてくれたのです。」

と、誇らしげに語ってくれました。これは、この卒業生一人だけではなく、**多くの卒業生や在学生たちの実感**だと思います。



アフリカのことわざにも、「**一人の子どもを育てるには、ひとつの村が必要である**」とあります。**人格形成の土台をつくる**ときが**小学校時代**です。勉強は楽しい、失敗してもいい挑戦することが大事、チャレンジしてこそ人は賢くなる、人は連帯できるものなど、全部、将来その子が**たくましい若竹に育つための「ねっこ」**です。小学校時代の豊かな経験や人との出会いは、その**子どものキャリアを劇的に変えます。ぐんぐん見違えるように成長していく**のです。大工になったある卒業生は、「**建物は2階からは作れない**」と基礎・土台の大切さを家づくりに例えながら、小学校時代の頃を感慨深げに語ってくれました。

「若竹」のように**“すくすくと伸びゆく子”**を育てるためには、**多くのよき人の関わりが大切**です。人は人によって育ちます。大地にたくましく根を張り、青々として天空に向かって真っすぐに伸びる「平和竹林」の竹は、私たちにいつもそうした子育てのメッセージを贈ってくれているのです。(晃)

